

〔テーマ〕 戦後80年への思い

第19回

映画
「月光の夏」
上映会



ピアノ『フツペル』と共に
〜ピアノ『フツペル』が奏でる
平和への願い2025〜

■日時 令和7年8月15日(金)

■会場 サンメッセ鳥栖

■入場料 第1部・第2部共 **入場無料**

ご来場の先着100名様には、平和へのメッセージをご記入していただきます。(希望者のみ)

第1部 フツペルと共に 会場 1階ロビー

1. 平和への祈りを込めて 開演 11:00-12:00 (開場 10:45)

ベートーベン作曲ピアノソナタ第14番嬰ハ短調作品27の2「月光」

演奏者 片淵ゆきは(広島大学3年、鳥栖市出身)〔第30回フツペル鳥栖ピアノコンクール2024出場〕

2. 希望者による演奏

演奏をご希望の方(1人3分以内、先着10名様)は、8月1日(金)以降に戦後80年を迎えるにあたって平和へのメッセージを添えてサンメッセ鳥栖までお電話またはFAXにてお申し込みください。

(電話:0942-84-2121(受付時間:9時から19時まで)、FAX0942-84-2201)

第2部 映画「月光の夏」上映会 会場 4階ホール

1. 開演の御挨拶 開演 13:15-13:30 (開場 13:00)

齊藤美代子氏(元映画「月光の夏」製作委員会事務局長)

2. 映画上映会 開演 13:30-15:30

同時開催

鳥栖空襲パネル展

期間:8月1日から
8月24日迄

会場 1階ロビー

お問合せ サンメッセ鳥栖
TEL 0942-84-2121

主催 鳥栖市・鳥栖市文化事業協会 後援 鳥栖市教育委員会
協賛 西日本三建サービス(株)、キュウセツAQUA(株)〔順不同〕



映画 月光の夏

監督／神山 征二郎
企画・原作／脚本／毛利 恒之
(小説「月光の夏」 汐文社刊)

忘れられませんか

“月光”の調べと

“さよなら”の声……

太平洋戦争の末期、日本軍は敗色濃い戦況を挽回しようと、数百キロの爆弾を搭載した飛行機や艦艇で、艦船に体当たり攻撃を行ないました。十七、八歳から二十歳前後までの若者を中心としたこの作戦は、一九四四年一〇月二十五日から始まり、一九四五年八月十五日、敗戦のその日まで続けられました。塔乗員の死を前提としたこの無謀な作戦により陸・海軍より六千余人の若者が犠牲となりました。

■月光の曲と二人の特攻隊員

一九四五年、太平洋戦争の末期、二人の若い特攻隊員が佐賀県鳥栖市の鳥栖国民学校(現・鳥栖小学校)を訪ねてきました。二人の隊員は、出撃の前にピアノが弾きたいと、当時は珍しかった鳥栖国民学校にあるドイツ製のフツペルのグラントピアノを捜し当ててきたのです。

若者は、ベートーベンのピアノソナタ月光を見事に奏で、もう一人は、居合わせた子供達の歓声にあわせ海ゆかばを弾いて去って行きました。

一九九一年、鳥栖市在住の上野歌子さんは、戦時中鳥栖国民学校のピアノ係として体験した二人の特攻隊員とピアノの思い出をミニミニ誌に書きました。そして、その体験はラジオドキュメンタリー「ピアノは知っている―あの遠い夏の日」として地元ラジオ局より放送され、市民に大きな反響を呼び起こしました。

■映画化を支えた市民の力

市民達の反響は、鳥栖小学校に残された古ぼけたピアノの保存運動となり、「全国の人々にこの事実を知らせたい」と映画化の運動へと発展して行きました。一九九二年二月、総製作費三億五千万のうち一億円を市民募金でつくりあげること目標に、映画「月光の夏」を支援する会が発足し、製作支援の募金運動は日をおかず大牟田、知覧へ、そして九州一円へと広がり、同年度末までに目標を達成しました。市民達と手を組んで、製作をすすめたのは、独立プロダクション(株)仕事(旧社名俳優座映画放送株式会社)でした。「若者たち」シリーズ「忍び河」「潤の街」をはじめ、数々の良心作、意欲作を送りだしてきた同社としても独立プロとしては破格の制作予算のこの映画は、まさしく社運をかけた取り組みでもありました。

■とまらぬ涙、かみしめる平和、百万人が!

映画「月光の夏」は、元女教師のピアノと特攻隊の思い出を柱に、ふたりの特攻隊員のその後の運命、そして生き残った特攻隊員の現代にまで続く過酷な人生を、過去と現代を織りなしながら、事実をもとに描き上げます。

一九九三年五月、福岡、佐賀を皮切りに公開された映画「月光の夏」は、各地で大きな反響を巻き起こし、東京では、十二週間のロングランを達成し、その後全国各地での市民の手による自主上映へと発展しました。そして一九九四年四月、わずか公開一年にして百万人の鑑賞を実現しました。

■なによりも平和のために

戦争を体験しない世代がすでに人口の九割を越えています。そして、その比率は、今後一層拡大していきます。戦争の体験を受け継ぐとしても受け継がない時代が、もうそこまで来ています。

戦争、これまでの平和の八〇年余りの時代は、戦争の生々しい記憶の下に、言い換えれば、数百万、数千万の犠牲者の記憶を基に守られたと言ってもよいでしょう。

だからこそ、次の平和の五〇年、百年へと向かうために、戦争の体験の丸ごとを受け継ぐ努力が、今まで以上に求められています。

映画「月光の夏」は、過酷な青春の記憶を背負い、戦争を生きた人々の魂の叫びであり、戦争により、青春のさなかに人生を終らされた無数の若者たちへの鎮魂の協奏曲として、いまも全国各地で、立場を越えた心ある方々の手によって上映が続けられています。



毛利 恒之氏



神山 征二郎氏